

中国史いろいろ 道教の神々

戸田奈緒子

古来、中国では西洋諸国ほどは宗教色が濃くありません。かといって、宗教がなかったかというところでもなく、三大宗教といわれるものが存在します。仏教、儒教、道教です。このうち周知の通り仏教はインドからの外来の宗教であり、また儒教は宗教と呼ぶべきかどうかの論争があります。そういった観点からすると、道教のみが唯一、中国固有の宗教といえるかもしれません。道教は時には「道前仏後」と、王朝に優先的に保護された歴史があります。代表的なのは唐で、これは唐を興したのが李氏であり、道家の祖とされる老子の名が李耳だったことから、その子孫と称したからです。

道教は日本の神道と同じく多神教であり、多種多様の神々がいます。先の老子も、太上老君として神格化されています。道教には、他にも死後に神とされた人物は少なくありません。最も有名なのは後漢の関羽でしょう。神号を関聖帝君といい、現在、世界各地の中華街には、ほぼ必ずと言っていいほど関帝廟があります。元々は武神でしたが、信義を尊んだことから商売を守る財神としても信仰されるようになったからです。なお、関聖帝君とは明の天啓帝が贈った封号である「三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君」の略称です。

また、中国にも冥府には裁判官たる閻魔(羅)王がいるのですが、これも生前に公明正大であった人物が据えられることがあります。『隋書』に、死後は閻魔王となったという記述がある名将韓擒虎、硬骨で知られた北宋真宗期の宰相寇準、『包青天』のテレビドラマでも親しまれ、生前から名裁判官として「活閻王」とも呼ばれていた北宋仁宗期の包拯、等が閻魔王として畏敬されています。また、托塔李天王という神は、仏教の毘沙門天が唐の軍神と称えられた李靖と習合した神格ですが、この李靖は韓擒虎の実の甥だったりします。

道教の神々が数多いのは、人々の生活と密着しているからです。『西遊記』や『封神演義』にも登場し、民衆に人気のある有名な神、顕聖二郎真君は、額に第三の目を持ち、鎧を着て三尖両刃刀や弓を携えた武神の姿をしていま

す。彼が魔物、とりわけ水害を起こす蛟竜退治をするからであり、つまり治水の神です。害といえば、かつての中国では空を真っ黒に覆うほど蝗害が酷く、農業に深刻な被害を与えてきました。その蝗を駆逐する劉猛將軍が驅蝗神として信仰を集めました。日本で端午の節句に人形や絵姿で飾られる鍾馗も、元は道教の辟邪神です。海に近い地域では、航海・漁業の守護神とされた女神の媽祖(天上聖母)信仰が盛んで、特に台湾では現在でも親しまれています。

道教では女神も数多く、娘々と呼びならわされます。最高位の女神は西王母で、崑崙に住み瑤池金母などともいい、全ての女仙の長です。第二位には上元夫人がおり、戦の女神である九天玄女、西王母の末娘の太真王夫人、華北では西王母よりも信仰を集める碧霞元君、出産を司る臨水夫人、仏教の摩利支天を取り込んだ斗母元君、等が有名です。

自然現象もまた、神格化の対象となりました。特に、ギリシア神話の大神ゼウスやバラモン教のインドラ(帝釈天)、北欧神話のトール等が雷霆を武器にするように、古くから雷は強大な神と結び付けられてきました。道教においての九天応元雷声普化天尊も非常に位の高い神で、五雷、十雷、三十六雷、の雷神を束ねるだけでなく、人間の生殺吉凶を司り生成の鍵までも握るとされています。

これら数多い神々の上に立つ最高神は、諸説あります。「太元の先」に生まれた元始天尊、太上老君、「道」を神格化した太上道君を「三清」という最高神核に扱いますが、一般的には全ての神を統括する玉皇上帝(玉帝)が最高神とされます。

道教の神々は、中国の歴史にも顔を出すことが少なくありません。意外な所で、歴史との接点を見出せるのも面白いでしょう。

■参考文献

二階堂善弘著『中国の神さま：神仙人気者列伝』(平凡社)

とだ なおこ(司書・管理運営課)